

第５回：東南砂漠地域

国土の東南部イラク、ジョルダン国境に沿って砂漠地帯が広がっており、この地域はアラビア語でバディアと呼ばれている。大半が年間降水量 200mm 以下の乾燥地域であり、国土面積の 55% を占めている。冬期には氷点下を記録する地域がある一方、夏期の気温は 40℃ に達し、気温の年変化及び日変化の大きいことが特徴となっている。地形的には南部で標高が高く、ジョルダン国境にかけては溶岩層に被われた地域も分布している。

本地域では灌漑無しには作物の栽培が不可能であるため、ユーフラティスやカブール河等の河岸域でのみ作物栽培が行われている。しかしながら、これらの地域では飛砂や塩類集積が農業上の大きな問題となっている。さらに、集中豪雨による洪水もこれらの農地に大きな被害を及ぼしている。周辺地域はこれまで遊牧等に利用されてきたが、耕地の増大や植林事業等による禁牧区の増大に伴って、自然植生へのプレッシャーが高まっている。このことが、益々土壌の劣化に拍車をかけることになり、新たな飛砂や洪水の原因ともなっている。このような状況下で、砂漠化の防止技術及びバディアの有効利用手法を確立することは、今後のバディア地域の開発にとって極めて重要な課題となっている。

実際、バディア地域は地下水の利用や集水農業の導入により新たな開発の対象地となりはじめており、すでにバディアの開発に関するプロジェクトが数多く実施されている。ICARDA の試験場には集水手法のモデル圃場が設けられており、アレppo郊外のマラガ試験地では植生改善や放牧地管理の試験が実施されている。灌漑局は、UNDP の協力により、ムハッセ試験地における効率的な水利用を目的とした総合流域開発プロジェクトを実施している。バディア開発局は、ACSAD 及び GTZ と共同で、ジャバル・ビシリにおける沙漠化防止やカスラ地域における飛砂固定に関する研究を実施している。ジョルダン及びイラク国境に近いタンフ地区では、各種集水手法を利用した植生改善や畜産開発が実施されている。さらに、ハッサケ県のアブデルアジズ山をプロジェクトサイトとして、日本の研究者と青年協力隊員が資源管理の立場に立って、牧野における植生、土壌、畜産に関する調査活動を実施し、興味深い知見が数多く得られている。シリア国における農業開発を長い目で見た場合、国土の半分以上を占めるバディア地域における資源管理は基本的に重要な課題であり、今後とも同分野における日本の貢献が期待されているようである。



ICARDAの集水手法
モデル圃場



マラガの放牧地管理
試験圃場



ムハッセ試験地の
集水状況